

那活沁要書



前

上海图书馆藏

No. 208153

酒竹

金月溪隱士家屋印

去

二五

以津久遠一

二名海 万全

2

3.

卷五

武藏野

傳

4.

眩暈

金齒  
二

住江干

萬年  
 萬年

一夜出書

加茂川

萬曆九年

右學西奉少師於水受之

中

卷七 楊柳詩

之方名

○今世之所謂學者、其於今者、雖有之、而不可得也。  
○一、所謂學者、其於今者、雖有之、而不可得也。

卷之六  
 書  
 李師師  
 李師師  
 李師師

二、

百

百半

張氏

十

五

for

五、

公司

二百五

二

1/14/20

三

$\frac{12}{15}$

号

百子

八十一

五頁

賦物之事

一 賦物五ヶアリ。山。道。木。船。人。

歌ニ曰

山ハ伊勢道ハ佐吉 木ハ春日  
船玉津島 人ハ三熊野

人ト云ニ二流アリ一flowニ右ノ如ク三熊野又一flow  
ニ人ハ人丸也此五神其日ノ席ヲ司トリ至フ勸  
諸ノ神也 五字ノ内一字賦物ニ出ハ五社ノ内ノ  
一社ニアテ、觀念スヘキ也

一 小賦物之事 一字露頭 二字返音 三字中

畧 四字上下略 上賦下賦如常 千夕ナトノ時ハナ取

共ニ上賦下賦ニハセスニ取 三取ホドハ石ノ四品可有

一字露顯ハ日ヲ火 名ヲ菜等也

二字返音ハ 夏ヲ細 花ヲ繩等也

三字中略ハ 霞ヲ紙 アヤメヲ兩等也

四字上下略ハ 玉章ヲ松 苗代ヲ橋等也

二字返音ニ聲ヲヨミニル例 亭ヲ鞭等也

一字重轉 詩ヲシ、矢ヲヤ、

二字除篇 松ヲ公 酒ヲ酉 灰ヲ火 除篇ニハ

冠ヲトルヲモ 篇ニ撰スル也 灰ノ字ノ如シ、

三字上畧 サカリヲカリ等也

四字中二字畧 ウグヒスヲウス等也

三字除篇 扇ヲ羽等也 右ニアル如ク冠ヲトルヲモ  
除篇ニ撰スルナリ

六字中四字略 カタジケナシヲカシ等也

一字重轉ヨリ以下ハ俳諧ニテノフニ連哥ニハ本作

法ノ四ケヲ用ルニ 千夕ノ時ニ三取ホド石ノイロクニル

也 常ノ百韻ニ上賦下賦也

賦物ハ第三迄ノ字ヲ吟味スルニ發句ノ中ナニ不限也

後々切字之事

一三股切とい物ノ名ヲ三ツ云強ル也三股ニ切ルヲ云也

六月西ハ翠の折風若乃み

三名切を云

花ハひと柳ハかきと云はは風

大上りの事

吾輩は云より落る花の浪

あかたうとま自のこくまはは

君も下ぬ風のたゆ秋の月

色去りの事

一ありーいーありー 色ーいーえー

白き云のーあり切字は乃次 たにき  
又ヌルがコワ

現互のー此事

一ふー ことー おやー まー 白ー 赤ー

くらー ちー ちー

世等の類なる現互のー也切字は乃次 切件

未来のー乃事

一ありー なきー ありー ありー

世もいふ未来はーい切字は乃次

一 大いなる山あり 郭云

近き

ありき 一 大いなる山あり 郭云

未来の

郭云 大いなる山あり 郭云

未来の

里と一 大いなる山あり 郭云

未来の

現在未来の 一 にて あり 大いなる山あり 郭云

後方の切字 一 現在未来の 大いなる山あり 郭云

と云の 一 大いなる山あり 郭云

読ありの事 大いなる山あり 郭云

大いなる山あり 郭云

大いなる山あり 郭云

大いなる山あり 郭云

大いなる山あり 郭云

切字疑や 一 大いなる山あり 郭云

二字切字 大いなる山あり 郭云

大いなる山あり 郭云

大いなる山あり 郭云

二字切字 大いなる山あり 郭云

大いなる山あり 郭云

一 庭子の奥をうら 次のはるまき 昔年の  
いふよりうら してはるまき 庭にねるを折ふ  
れはるまき 名をきき きてはるまき 又ねる時  
のうらをきき きてはるまき 庭にねる  
てはるまき きてはるまき ねるめ

一 庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら  
庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら

一 庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら  
庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら

一 庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら  
庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら

かおるの奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら

一 庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら  
庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら

一 庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら  
庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら

一 庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら  
庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら

一月の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら  
庭の奥をうら 庭の奥をうら 庭の奥をうら

春十句





延喜四年  
三月廿五日  
洲林  
不  
墨  
方

接興  
小林露子

桑園文集

松霞菴  
月南

附

明正平四日



鵬齋秘書

後

國立中央圖書館藏

N298153

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

同華園文社設立

園友 弘復 春月甫

明正五年

離譜秘要

一 離譜の起之事

杵臼譜は連歌より出たる連歌に  
あゝのほろ乃下ろし女神男神  
をより家時女神をよみ  
あゝ男神よりて何れ男神をよ  
みよるをよみて男神なり号  
なり

ア十ウレシエミアイヌヲトメ

其時又女神ありりく

アナウレニエニシアイヌオトコ

中よりふき出歌とて連歌の類人全

十二代常行天皇此詩子貝中武尊乃

ニイハリツクハナスキテイノヨカ子ヌ

ト上の句をテも例りより連歌

トテ撰集之上京上の句をテつて

下の句をテ下の句をテつてそれより

つてつて白紙のまゝなるなり

二年藤原公家告して乃相々或月と

定り下りて意ある年、後書光因

二条良基云平徳元〇は後光因寺

園白一条良基云此かよりいへ飛元〇

牡丹花宵拍動を後書也一と武尊

トよ美人の歌よをも想ふと一と情

けくといふ一とよす多し海をき歌

のりをあふ雄略の望錫とよりん定

既よ廣その頃卯月の末は一と九条福圓

系極座中へ連歌の山云有り、其座の  
は高き座座下部山云有り、其座  
は杜のいふ咲れ、を宗鑑よりく  
はも、いふあり、宗鑑より、其座  
移り杜を移し、より、宗鑑より、其座  
いふあり

宗鑑が安をいれ、録鬼つゝ、龍云  
と、其座より、宗鑑杜を移し、其座  
移り、其座より、宗鑑より、其座

と、其座より、其座より、其座より、其座  
其座より、其座より、其座より、其座  
其座より、其座より、其座より、其座

其座より、其座より、其座より、其座  
其座より、其座より、其座より、其座

其座より、其座より、其座より、其座

其座より、其座より、其座より、其座

其座より、其座より、其座より、其座  
其座より、其座より、其座より、其座  
其座より、其座より、其座より、其座

福因江云と書及下都云と細川云有  
江下都云家の宗匠宗上右紙已山修  
宗澄子介云とありさしむる久酒の  
下酒の江岸ありと云うのはあは  
江云江云きくは猶然未莊の事な  
き都澄の一度と書懐きして江下都云と  
下りしひて都澄の宗匠と許先云と

花は江下都云人行書

江云

去りて後りてくさぬの船

書

江下都云と書及下都云と細川云有

江云

江下都云と書及下都云と細川云有  
江下都云家の宗匠宗上右紙已山修  
宗澄子介云とありさしむる久酒の  
下酒の江岸ありと云うのはあは  
江云江云きくは猶然未莊の事な  
き都澄の一度と書懐きして江下都云と  
下りしひて都澄の宗匠と許先云と  
花は江下都云人行書  
去りて後りてくさぬの船  
書

育ても荒れよするに人むあやみけり  
かゝる時回とつけずいふ酒をい田舎を  
けりももちあふゆかり

一振はそむけり

別くの若はありふ振ありけり

そむをけりてそむふなりけり

振せよき世をわけては縁衣

中への花はけりよも

けりてふも名ありけり

おひひり別も世にけり

右のを振りそむけりやもけり乃こ

振のまかり

そむ振つる時もそむふなりけり

一振はそむけり

そむもあふ浦のをちと

そむのすけはありけり

おふ浦のをちそむけり

そむのすけはありけり



くさふ<sup>三</sup>海<sup>三</sup>の<sup>三</sup>ころ可<sup>三</sup>考

まけ<sup>三</sup>ふ<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>の<sup>三</sup>は<sup>三</sup>云

知<sup>三</sup>け<sup>三</sup>ひ<sup>三</sup>楊<sup>三</sup>麻<sup>三</sup>の<sup>三</sup>門<sup>三</sup>や<sup>三</sup>辰

是<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>の<sup>三</sup>詞<sup>三</sup>す<sup>三</sup>り<sup>三</sup>て<sup>三</sup>分<sup>三</sup>る<sup>三</sup>た<sup>三</sup>派<sup>三</sup>

店<sup>三</sup>の<sup>三</sup>白<sup>三</sup>作<sup>三</sup>考<sup>三</sup>合<sup>三</sup>句<sup>三</sup>作<sup>三</sup>け<sup>三</sup>う<sup>三</sup>

一<sup>三</sup>虚<sup>三</sup>実<sup>三</sup>事<sup>三</sup>

湘<sup>三</sup>虚<sup>三</sup>実<sup>三</sup>と<sup>三</sup>く<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>と<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>と<sup>三</sup>あり

云<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>ん<sup>三</sup>と<sup>三</sup>い<sup>三</sup>ふ<sup>三</sup>と<sup>三</sup>ぬ<sup>三</sup>実<sup>三</sup>を<sup>三</sup>虚<sup>三</sup>す<sup>三</sup>り

り<sup>三</sup>と<sup>三</sup>わ<sup>三</sup>の<sup>三</sup>虚<sup>三</sup>虚<sup>三</sup>虚<sup>三</sup>と<sup>三</sup>て<sup>三</sup>実<sup>三</sup>実<sup>三</sup>実<sup>三</sup>

虚<sup>三</sup>を<sup>三</sup>実<sup>三</sup>り<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>と<sup>三</sup>と<sup>三</sup>虚<sup>三</sup>実<sup>三</sup>の

さ<sup>三</sup>ん<sup>三</sup>と<sup>三</sup>り<sup>三</sup>る<sup>三</sup>さ<sup>三</sup>り<sup>三</sup>と<sup>三</sup>実<sup>三</sup>を<sup>三</sup>虚<sup>三</sup>す<sup>三</sup>り<sup>三</sup>付

実<sup>三</sup>と<sup>三</sup>り<sup>三</sup>り<sup>三</sup>つ<sup>三</sup>て<sup>三</sup>と<sup>三</sup>虚<sup>三</sup>の<sup>三</sup>実<sup>三</sup>

す<sup>三</sup>と<sup>三</sup>け<sup>三</sup>る<sup>三</sup>の<sup>三</sup>秘<sup>三</sup>と<sup>三</sup>と<sup>三</sup>店<sup>三</sup>の<sup>三</sup>す<sup>三</sup>り<sup>三</sup>

上<sup>三</sup>十<sup>三</sup>万<sup>三</sup>の<sup>三</sup>事<sup>三</sup>

是<sup>三</sup>と<sup>三</sup>七<sup>三</sup>字<sup>三</sup>教<sup>三</sup>と<sup>三</sup>白<sup>三</sup>と<sup>三</sup>派<sup>三</sup>と<sup>三</sup>と<sup>三</sup>派<sup>三</sup>

実<sup>三</sup>と<sup>三</sup>に<sup>三</sup>い<sup>三</sup>ふ<sup>三</sup>

と<sup>三</sup>派<sup>三</sup>の<sup>三</sup>実<sup>三</sup>と<sup>三</sup>の<sup>三</sup>実<sup>三</sup>

と<sup>三</sup>派<sup>三</sup>の<sup>三</sup>実<sup>三</sup>と<sup>三</sup>の<sup>三</sup>実<sup>三</sup>

くよつて笑われ一白笑えし  
佛にて二の房の屋一ちなき  
きりきりあれりよをわつて笑こ  
こなきにねえもよきぬ月れ  
おのろ乃つけく文條り月桂下  
も有りてをを嘆ひつ白と下る  
大も之けんかきりきりつけり  
るををのりきり入て屋をわつる  
神神をわぬ神もきりきりわつてせり

けんの大盛りりてはくし程入てはく  
てはくしわねえ

一ち一箇りのり

身のういわいねえ

何をきりきりきり

神やきり神はきりきり

神は神はきりきりきりきりきり  
白作すきりきりのきりきりきり

司いきりきり

一才ニて海のし

月ニて海にありまを借りて  
てしあるものありて海にありて

八月海の影のをれ地やで

中庭に月影は雲の影に似て

と皆て地やに似てををいふに似て

りてて地やに似てををいふに似て

柳橋秘あきとふ終

延喜寺

二月廿日

津林

れ

墨書

授興

小林清文